

誘惑のパフォーマンス

—〈アーネスト〉への期待と『まじめが肝心』—

浦崎 佐知子

1

異性を愛を常態の愛と捉え、家族という構成単位で営まれる家庭生活を普通の生活と捉える社会空間において、おそらくひとびとが法制度としての結婚から享受できるであろうと考える事柄は少なくないだろう。そのことは、現代日本においても、民法を始めとしたあらゆる法律の諸規定から理解される。それは親族や相続、社会保障、税金などの制度に当事者として出会ったときにすぐれて感得されることでもある。そしてその法制度や社会慣習によって、われわれの生活や思考の様式、セクシャリティは条件づけられている。

オスカー・ワイルドの喜劇『まじめが肝心』（1895）のなかに、ヴィクトリア朝階級社会の包摂するコードが上流階級の男性の結婚観に作用しているようすを見ることができ¹。物語には恋愛と結婚によせる男性の期待と取り組み、そしてそれを通してじぶんを作っていくさまが描かれる。つまり男性が恋愛の過程で自らを演じ方向づけ、結婚という現実²に結んでいくようすが描かれている。『まじめが肝心』論において、クリストファー・クラフトは「またの名バンベリー（‘Alias Bunbury’）」ことジャックの秘密とその行為の過剰さを拡散する快樂と欲望の物語のなかに読み、「アーネスト」としての人生の始まりを「バンベリー」なる放縦の極まりとそれの終結に結びつけて論じる²。この稿が目指すのは、クラフトの示した解釈にく誘惑の主題をめぐる議論を撚り合わせて、新しい解釈に結ぶことである。

ヴィクトリア朝の小説には、結婚による上流貴族の地位のいっそうの確立（‘establishment’）や、ひとびとの階級上昇の経験、あるいはその逆の降下³がたびたび描かれる。結婚がもたらすそのような性質は、たとえば上流階級の男性のセクシャリティ構成を原則的には異性愛一方向に強制／矯正し、若い上流階級女性との正しい結婚へと向かわせるだろう。この稿の考察は、ヴィクトリア朝社会において上流階級の男性のセクシャリティは、社会慣習の拘束力によって強く干渉されたで

あろうという仮定と、彼らの嗜好や生活作法は、他の誰よりも規範化と様式化を要求されたであろうという議論を前提としている。³

2

エド・コーエンは、*Criminal Law Amendment Act* (1885) によって、法が同性愛に対する規制と矯正の態度を明確に打ち出したこと、そしてジャーナリズムの言説がそれと競合するように、男性の同性愛に関する煽情的なゴシップ本位の報道を続けたことを検証する。⁴ そして過剰な言語と視覚イメージが⁵、中流以上の階級の男性のセクシャリティについての、ひとびとの厳格なスタンダードを求める声に拍車をかけ、同性愛嫌悪と恐怖が一般化したことを論証する。⁵ 規範的セクシャリティとは異性愛を指すが、異性愛者であることとはいったいどのように示されるのか。制度としての結婚を当事者として受け入れ、それを果たせば、ただちに正しいヘテロ男性としての証明となったかどうかについてはいったん棚上げにしなければならない。大事なのは、結婚という状況が男性に家の長としての人生を開き、将来的後継者を作る資格を有する者としての社会的認知を得させるということである。そしてもう一つ大事なのは、それによって男性が妻とした女性に対し夫としての義務行為の遂行を誓約する者となり、自然な異性愛者としての自己を一応宣言することになるということである。

結婚生活が男性のセクシャリティに干渉していることについて、『まじめが肝心』の登場人物グエンドレンは直截に語る。男性にとって家庭こそ「正しい空間」であり、「家庭の義務を怠る」と男性は「痛ましくらい女性化してしまう」けれど「そうするとすごく魅力的」(117)と、彼女が関心を抱きながらも暗に男性の同性愛指向を牽制し、防波堤としての家庭空間の重要性を説いているのが理解される。男性が「本領を発揮」せず、外で「お好みの交渉を持つ」のも、それはそれで「魅力的」(117)というグエンドレンのこぼれには性的ニュアンスが色濃く読みとれる。

物語は上流社会の若い男女4人の恋愛を主軸に展開される。女たちグエンドレンとセシリーは恋の理想の相手に「アーネスト」(‘Earnest’)であることを求め、その男性に「アーネスト」(‘Ernest’)という名を期待する。男たちジャックとアルジャンンはきまぐれに「アーネスト」を名のっているが、魅力的な女たちに出会い、はからずも「アーネスト」という記号をじぶんがまもっていたことに明確な目的性のあったことを見出す。彼らはじぶんこそ「アーネスト」であると主張し、好ましい女性を、つまりジャックはグエンドレンを、アルジャンンはセシリーを口説く。お決まりの混線脱線のあと、じつは二人とも「アーネスト」でないことがばれる。

アルジャンンはセシリーに、でたらめにも「アーネスト」を名のった理由を「あなたに会う機会をつかむため」(149)と告げる。するとその言い訳が気に入ったセシリーはすぐに機嫌を直し二人の恋愛は成就する。他方ジャックも同じようにグエンドレンに説明するが、頑迷なブラックネル卿夫人が立ちはだかり、首尾良く事は運ばない。だがそうするうちに軍人名簿でジャックの実父の名を発見し、拾われた子ジャックの名がほんとうに「アーネスト」であったことが判明する。ジャックの出自について正式な保証が得られたところで、ようやく彼とグエンドレンの恋愛も成就し、大団円の結末を迎える。

上流家系の後継ぎ息子であるアルジャンンは結婚や家庭生活にまったく関心を示さない。恋愛主義者のアルジャンンは求婚や結婚について「それはビジネス」(7)と完全に割り切り、それらが既成事実として確定してしまったあと「そこにはロマンティックなところなどなにもない」(7)と断言する。彼にとってロマンスがロマンスたりうる所以は、その不安定さにある。相手の愛情に確信めいたものを感じるどころか、なにひとつとして正確に推し測ることができず、つねに疑心暗鬼に陥りやすく不可解な気持ちをどうすることもできない、そこにアルジャンンにとってのロマンスの所以がある。

一方ジャックはグエンドレンとの恋愛と結婚に単純に憧れ、彼女に促されるように求婚を申し出る。しかしアルジャンンと違って、ジャックは上流家系の正統の後継者ではない。ジャックには上流の男子としては致命的な出生に纏わる秘密がある。ジャックはヴィクトリア駅の手荷物一時預かり所で拾われた子、なにかのまがいいで「やや大きめの黒い革の手さげ鞆で、柄のついているつまり普通の手さげ鞆」(46)に入った忘れられた子だったのである。グエンドレンの母であるブラックネル卿夫人はその事情を聞き、愛娘の結婚相手としてはあまりに不十分であると、ジャックに対する嫌悪と不信感をつのらせ、怒りをぶつける。「駅の手荷物一時預かり所となれば、淫らな行為の後始末に使えなくもなし」、「上流社会で立派な地位を占めるための確固たる根拠になるとはまず考えられるはずがありませんこと」(47)と彼女は暴言を吐いて捨てる。ジャックの入った鞆が資産家のトマス・カーデューなる老紳士にまがって手渡された結果、彼はカーデュー氏に拾われ、後見を受けることになったという。

曖昧模稜とした「出自の秘密」を知ると余計に、グエンドレンのアーネストへの関心は高まる。けれども彼女が熱を上げるのは「アーネスト」にであって「ジャック」ではない。彼女は「ロマンティックな出生の秘密」に「心の底から感動」し、「アーネスト」という「お名前もたまらないほど魅力的」、「単純な性格だってすごく不可解ですよ」(59)と感情を抑制せずに言う。グエンドレンは、まるで予想し

ていなかったようなことばかりが次々とその身に降り注ぐアーネストに夢中になる。しかしその「ロマンティックな出生の秘密」(59)が公明正大にならなければ、ジャックは上流の男性としての社会的認知も得られず、それがなければグエンドレンと結婚の約束を取り結ぶこともできない。つまりロマンティックな不安定さが残されたままでは二人は結婚に向かえないのである。

また気まぐれではなくほんとうに「アーネスト」になるために男たちは洗礼を受けて改名しようとする。まじめにセシリーとグエンドレンとの恋愛ゲームの盤上に上がろうとする二人に、彼女たちは大いに感動する。というのは彼女たちは、重大時には「誠意があるかないかより、その仕方こそが肝心」(150)ということを心得とし、そこに込められているかもしれぬ意味や内容より、言動のスタイルに力点を置いているからである。それはブラックネル卿夫人がジャックに対して、グエンドレンとの結婚に際してはまず「一刻も早く誰か親類縁者を手に入れて、社交の季節がすっかり終わらないうちに、男親でも女親でも、とにかく親を一人ひねりだすように懸命に努力をなさい」(48)と言うのと似ている。思い悩むのではなく、なにかを言ったり行うことで形を整えることが重要なのである。

3

それぞれに思惑を抱きながら、4人はのめり込むように恋のゲームに夢中になる。彼らは恋の成就を期して荒唐無稽の劇を演じることになる。女たちは男たちと出会う前からすでに「アーネスト」という名の男を恋愛対象としてイメージし、じぶん自身に宛てて「アーネスト」からの空想の手紙を書き、プレゼントを送っては一喜一憂している。女たちが恋の対象として「アーネスト」を喚起し、現実のものではない恋愛に熱中しているそこに、偶然ぴたりとはまる「アーネスト」が現われ、誘惑の契機が生じる。男たちはナルシストとの誘惑ゲームに意識的に絡めとられながら、女たちとの関係にもっともらしくリアリティを与えようとしていると言える。男たちはそれを様式にはめ込む手順を追っているのであり、その作業は彼らにとって社会化の過程と捉えることができる。

バルトは、誘惑の行為とその記号性について次のように述べる。

自分の愛を証明したいと思っても、自分が愛されているのかどうか知りたいたいと思っても、恋する主体は（自分の意のままに使うことのできるような）、確実な記号体系をいっさい持ち合わせていない。⁶

[括弧内筆者]

バルトにおいては、誘惑の行為を、他者への積極的で強力な働きかけとして捉えることは不可能である。恋する主体の発するさまざまな言語や行為（記号）は、すでに主体のコントロールから逃れている。恋する主体を誘惑者とする、恋愛や誘惑の現場において、恋する主体はじぶんのことばの意味を自身で決定することができない。意味の決定権はつねに相手側にある。⁷ 恋愛の政治学において、恋する主体は孤独と不安の経験を生きなればならず、状況的にその運命を避けることはできない。⁸

愛情の関係において誘惑することとはつねに、誘惑されている相手より弱い立場に立つことでもある。誘惑とはこちらの「弱点を攻めてくるように他者に呼びかける挑発」である。⁹ 誘惑するとは「弱くある」ということである。誘惑するとは、じぶんの弱さによってそれをしているのであり、強力なパフォーマンスによってではない。誘惑とは、誘惑しようとする主体が、この次こそは、主体の誘惑対象である他者によって誘惑される側にありたいがための目的的行為／パフォーマンスである。¹⁰ すなわち「他者を誘惑する」という行為は、次にこそ「他者がじぶんを誘惑してくるように他者を仕向けること」の成功を願う強い期待感と結びついている。

真に誘惑的と言える主体とは、他者をして誘惑者たらしめる者のことである。その誘惑の現場／パフォーマンスにおいて「彼」という代名詞はなんの意味もなければ必要もない。¹¹ 恋愛の現場において「あなた」や「わたくし」は有効に使える代名詞だが、「彼」あるいは「彼女」は、恋する主体が対象に対して直接にはもっとも使うことの少ない代名詞である。さらに重要なのは、恋する主体にとって、愛してしまったひとは他の誰とも取り替えの効かない固有名詞的存在であるということである。¹² そうであるならば、恋する主体である「わたくし」が、恋の対象である他者にとっての固有名詞的な唯一の存在になること、これこそが恋愛の成就、誘惑のベクトルの反転を証すものとなる。

誘惑される対象から「誘惑する主体」へのグエンドレンの変容を企図する誘惑のパフォーマンスは、ジャックにとって「アーネスト」という固有名詞なしには遂行不可能である。なぜならばグエンドレンが不在の「アーネスト」に執着しすぎているからである。「アーネスト」という恋の記号のかなたから「アーネスト」なるなにかを漂わせる男が現われたなら、¹³ そこではじめてグエンドレンは、他の誰とも取り替えることのできないその男を愛するようになる。したがって「アーネスト」は恋の経験の先行条件である。その「アーネスト」という記号をめぐる関係のなかで、そして誘惑の駆け引きのなかで、じつは彼ら全員がつねにじぶんの恋愛が壊れるというカオスへの転落の危機にさらされている。対象喪失の病メランコリーを回避するために誘惑し続けなければならないのである。

物語のなかに恋の進行を促したり、あるいは障害として機能する小道具、小さな書き物が頻繁に見い出される。たとえば男たちは、名刺や鉄道の一等切符、軍人名簿、ホテルの勘定書などによってプロフィールを与えられている。一方、女たちを運命づけているのは、彼女たちが記した日記、メモ、手紙、未刊行の小説の類である。「アーネスト」との恋愛と結婚への期待は、彼女たちが想いのままに書き綴った予定調和をそのまま実現することなのである。だがその願いが叶うためには、出生届、洗礼式や堅信式の証明書、麻疹や百日咳や種痘の証明書、登記簿、法的処理の済んだ遺言状、貴紳録、地方紙及び都市の有力新聞の記事、国債の証券、家系や所有財産を確定するための一流法律事務所の作成による文書など、もろもろの公的文書が必要となる。皮肉なことに、彼女たちのロマンティックな私的エクリチュールは役に立たない。またジャックは、すでに上流家系の嫡子として社交するアルジャンと異なり、上流社会と折り合うように自らの身柄を整理しなければならない。そのときもろもろの社会的文書が、グエンドレンにジャックの「アーネスト」を約束する上に、彼の身柄を規定し保証する手形の役を果たすことになる。

グエンドレンの期待に沿うようにジャックは結婚への道を急ぐ。

ジャック あなたを愛しています。……
 グエンドレン 大好きですわ。でもまだ求婚してらっしゃらないわ。結婚の「け」の字もないわ。……
 ジャック では……いま求婚してもよろしいのですか？……結婚していただけますか？
 グエンドレン もちろんですわ。あなた。ずいぶんと手間がかかること！求婚の仕方あまり経験がありません。 (35-7)

ジャックは魅力的な女との結婚を果たすために手順を踏む。精神的融合への期待を裏切らないことはもちろん、適切な方法をもって結婚制度へ接近することを彼は求められる。ジャックにとって上流社会の女性グエンドレンと正式の結婚を果たすことと、それによってふつうの男であることを証明し、社会的地位を確立することとは切り離せない。約束ごとのなかにじぶんを位置づけ、目に見える輪郭をじぶんに与えることを彼は求められている。

しかしながら、上流社会に流通する文法の権化のようなブラックネル卿夫人の承諾を得ることなしには4人とも結婚に到れない。アルジャンの伯母でもある夫人

はひとつとおり若い男女の結婚をやかましく指図せずには気が済まない。

ブラックネル卿夫人 甥のアルジャンノが何だか異様にねちねち手を握っているあのお嬢さまはどなたかしら？

ジャック ああ、婦人はセシリー・カーデュー嬢、ぼくの被保護者です。
……

ブラックネル卿夫人 いったいそのカーデュー嬢はロンドンの大きな駅のどれかと関係がおありですか？参考までに同っておきたいのです。昨日まで出生地が鉄道の終着駅という家族や人間がいるとは思ってもみませんでしたのでね。(157-58)

セシリーの身元や財産の保証だけを重視するブラックネル卿夫人の言動には、上流社会を網掛ける約束ごとが臆面もなく露呈する。

ジャック カーデュー嬢はロンドン南西区ベルグレイブ広場149番と、サリー州ドーキングのジャーヴス・パーク、それから北英ファイフシャーのスポーランにお屋敷を所有する故トマス・カーデュー氏の孫娘です。

ブラックネル卿夫人 まんざらでもなさそうね。住所が三つもあればいつも信用は得られます。……でもその信憑性についてはどんな証拠がありましたか？

ジャック 当時の『貴紳録』を大事に保存しています。いつでもご覧にいたしますよ……カーデュー家の顧問弁護士はマークビー・マークビー・アンド・マークビー法律事務所ですが。

ブラックネル卿夫人 ……斬界で一流中の一流事務所ですわ。……これまでのところ結構ですことね。……

ジャック これもお気に召されると思いますが、カーデュー嬢の出生届、洗礼式、百日咳、登記、種痘、堅信式、はしかの証明書も手もとにございます。ドイツ語のも英語のも揃っております。……

ブラックネル卿夫人 形式上、伺っておいたほうがよいのでしょうかからね、カーデュー嬢は少しは財産がおありですか？

ジャック なあに！国債で13万ポンドくらいでしょう。それだけです。
……

ブラックネル卿夫人 13万ポンド！しかも国債で！カーデュー嬢はたいそう魅力のあるお嬢さまですことねえ、こうして拝見しておりますと。……可愛らしいこと！……結婚式はね、さっそく挙げた方がよろしいわ。(158-64)

夫人が娘や甥の結婚相手に要求する条件は正統の出自、健康な身体、そして十分な財産と家柄である。さらにブラックネル卿夫人の思考は、ひとのさまざまな経験や生活の在りようがデータとして管理され、それに一定の秩序づけが可能であるという統計学的思考に集約される。

ブラックネル卿夫人 ハートフォードシャーのこのあたりの空気には妙に人を刺激する成分でもあるのかしら、でもこれで進行中の婚約の数はわたくしたちが参考にする統計学上の平均値を上回ることでしょうね。(158)

ブラックネル卿夫人は、じぶんの属する上流の社会を閉じることが可能であると考ええる。彼女は上流婦人たちの契約によって、じぶんたちの愛娘の「花婿候補として資格を有する上流階級の独身男性」(40)というカテゴリーを作り出している。だがその「花婿候補者リスト」(40)にジャックの名は記されていない。夫人のノートにデータ管理される上流の秩序や社会にジャックは未だ参入していないのである。彼が正しい結婚を望むなら、それは夫人のノートにファイルされ、その閉じた世界に位置づけられていることを前提としなければならない。

しかし違った言い方をすれば、「バンベリー」(16)という別の名で奔放に遊びに興じるジャックが「花婿候補者のリスト」に入らないのは、より良き花婿を選び出そうとする夫人たちの理屈になっただけとも言える。彼の「バンベリー遊び」(16)とは、上流の娘たちの結婚相手の候補者の一人に数えてもらえるか否かを左右するリスクの高い遊びである。つまり「バンベリー」で遊んでいるあいだ彼は、「上流社会の独身男性」のカテゴリーを構成する一人として生きていくことと、その可能性を無効とすることのあいだにある未決定性の隙間を生きているというほかない。¹⁴あるいは「バンベリー」から離れたとしても、社会的認知さえ明確でないジャックの微妙な立場では、すんなりリストアップされそうにない。

ブラックネル卿夫人 あなたのお名前はわたくしの花婿候補者名簿に記載されておられません。……ですけれど、いまからでも書き入れてもよ

ろしいんですよ、もしお答が娘を思う親心になかったものであれば。(40)

喫煙の有無に始まり、年齢、収入と私財の内容、政党支持の傾向、そして家族についての詳細など、夫人の執拗な質問を受けるジャックの答えが記入されていく。そうするうちにジャックは観念し、夫人の認知を得て有資格者名簿に列挙されること、それもグエンドレンにとっての他では置き換えることのできない「アーネスト」の名のもとにリストに入り込むことが大事と悟る。すなわちジャックは夫人が試す上流紳士の作法に沿いながら、グエンドレンの期待にもかなったじぶんを演じ作っていかなくてはならない。だがここまで来ればあとは時間の問題である。父の名「アーネスト」が確認されることになれば、頑迷な因習の権化のごときブラックネル卿夫人のやかましいとがめだては、セシリーの場合と同様、ジャックに対してもうるわしい祝福に変わるだろう。

5

ジャックはグエンドレンとの愛情の成就を願い、努力を続ける自然な男性を演じているが、この物語に内在するのは、彼が結婚という出来事を前にしたときにあらわとなる社会の約束ごとの拘束力である。劇の最後のシーンにあるのは、グエンドレンとの婚約についてに到達したジャックの「アーネストが肝心」(187)という科白である。それはグエンドレンへの愛の誓いか、それともブラックネル卿夫人や社会に対する自己証明の言明か、そのどちらをも連想させる。ジャックが「アーネストが肝心」を言う理由はなにか。

ジャックがセシリーとアルジャンンの結婚について、彼女の保護者として反対する場面がある。ブラックネル卿夫人がつねにそうするように、後見人ジャックは若い男女の恋路にけちをつける。¹⁵

ジャック セシリーは成人するまでわたくしの同意なしに結婚はできません。わたくしはその同意を絶対に拒否する者です。(164)

ジャックが作法になかった禁止を宣言するのはいかにも滑稽だが、その表明自体は家長としての彼の将来を予告している。「アーネストが肝心」という科白は、社会の約束ごとと歩調を合わせ、抵抗や批判からは身を遠ざけるジャックの保身の人生と重ね合わせれば、極めて消極的なニュアンスを帯びている。しかし彼が上流社会

の男性として生きていくからには、意識的によりよい結婚に結び、「父の名」と「まじめである」ことの「肝心」を言うほかない。

「アーネスト」という記号は恋の経験に先立つ条件であり、同時に愛情の結びつきを期待する未来に向けての差異化の運動を成立させる。しかしながら父の名「アーネスト」を追慕する遡及的な運動はつねに社会的に条件づけられている。「アーネスト」として自己を成型しなければ、グエンドレンとの未来の断念という事態を招きかねないなか、ジャックが期待するのは父の名による解決とまじめであることによる解決だけなのである。

しかしブラックネル卿夫人の枠づける上流社会の約束ごととは無縁なところで、女たちは恋の対象として不在の「アーネスト」を作り上げている。ナルシストとしての女たちの自己完結性はそこにあからさまとなっている。自己完結性の高い存在はつねに誘惑的である。¹⁶ じつはすでに女たちは男たちよりも先に「非弱き誘惑者」として、じぶんを誘惑するよう男を仕向けることに成功している。

男にとって魅力的な女がそこにいる。しかし、それは「アーネスト」である「わたくし」しか愛さない、つまり「アーネスト」ではない「わたくし」のことは愛さない他者である。そして「わたくし」が「アーネスト」でないかぎりにおいて、「わたくし」はその他者を、「アーネスト」でない「わたくし」をも愛する他者へと変換する必要がある。だがその他者が「アーネスト」であることを執拗に要求し続けるかぎり、「わたくし」が「アーネスト」になるほかない。そこにある明確な企図とは、誘惑の対象であった他者が翻って誘惑する主体となり、他の誰にも置き換えることのできない「アーネスト」である「わたくし」を愛する存在として現前するようになることである。誘惑する主体は、他者によって誘惑され愛される対象となることを目的として誘惑を試みる。そして「他者をして誘惑する主体へと変容せしめる」ことで、誘惑の試みは一時的には成立するようにみえる。

グエンドレンとの愛情の関係だけで考えれば、彼女にとっての「アーネスト（であること）が肝心」である。「アーネスト」でなければ、恋する主体、そして非力な誘惑者として、対象に「まじめ」に向かうことはできないからである。制度によって保証されるのはつねに社会的なものであり、制度によって二人のあいだで永遠にシメトリーなコミュニケーションが成立するわけではない。どちらかが弱き誘惑者であればこそコミュニケーションの契機が発生するのであり、バランス良く保たれ続ける愛のコミュニケーションなどない、そのことを非力な誘惑者ジャックは経験則として学んだのである。

「アーネストが肝心」とジャックが言うのを、婚約や結婚という社会的契約の関係においてグエンドレンと結び合いながらも、彼女と誘惑的主体／他者の関係

のなかにあり続けられるかという課題を自らに投げかけていることばとして解釈することができる。愛情の関係において「彼」という三人称代名詞によって無化され、恥をかかされるようなことがあってはならない。グエンドレンにとっての固有名詞的存在「アーネスト」としてのみ、誘惑のゲームを生きることができるのだから。「アーネストが肝心」という科白は、枠づけられた空間のなかで隙間を模索するジャックの「バンベリー遊び」の続きを夢想するつぶやきともとれる。だがそれは「気まじめ」に人生の苦い局面を開きながら、非力な誘惑者としてあり続けることへの期待を「アーネスト」に見い出したジャックのつぶやきなのである。

父の名「アーネスト」を発見することでジャックは正統の上流階級の男性と認められる。そしてそれに続くグエンドレンとの結婚は彼にいつその地位確立を約束する。閉じることを良しとする上流社会の紛れもない実数になること、そうすることでしかグエンドレンとの関係を、夢世界のロマンスにばかりでなく、現実の結婚に結ぶ方法はない。ジャックはそれを自らの仕事として受け入れ、家長「アーネスト」として生きることを選ぶ。しかしながら『まじめが肝心』を読むなら、そのように条件づけられたジャックの——恋愛の現場においては非力な誘惑者でしかなく、他者との誘惑ゲームの地平に彷徨い、カオスへの転落の危機にさらされながら——誘惑ゲームの継続を求める「アーネスト」としての在りようを読まないことがあってはならない。

注

- 1) Oscar Wilde, *The Importance of Being Earnest, The Collected Works of Oscar Wilde Volume VI*, ed., Robert Ross (London: Routledge/Thoemmes Press, 1993). 以下 *The Importance of Being Earnest* からの引用はこの版からの拙訳により、頁数は本文の引用後の括弧のなかに示す。日本語訳に際しては西村孝次訳『まじめが肝心』（『オスカー・ワイルド全集 2』所収、青土社、1989年）を参照した。劇構成については *Oscar Wilde's The Importance of Being Earnest, A Reconstructive Critical Edition of the Text of the First Production*, eds., Joseph Donohue and Ruth Berggren (Bucks: Colin Smythe, 1995) を参照した。
- 2) Christopher Craft, 'Alias Bunbury: Desire and Termination in *The Importance of Being Earnest*,' *Representations* 31 (Summer 1990), 19-46.
- 3) Ed Cohen, 'Writing Gone Wilde: Homoerotic Desire in the Closest of Representation' in Regenia Gagnier ed., *Critical Essays on Oscar Wilde* (New York: G. K. Hall & Co., 1991), pp. 68-84. Alan Sinfield, *The Wilde Century—*

- Effeminacy, Oscar Wilde and the Queer Moment*— (London: Cassel, 1994), pp. 67-75. Joseph Bristow, 'Wilde's Fatal Effeminacy,' in *Effeminate England—Homoerotic Writing After 1885*— (Buckingham: Open University Press, 1995), pp. 16-49. Regenia Gagnier, 'Wilde and the Victorians,' in Peter Raby ed., *The Cambridge Companion to Oscar Wilde* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997), pp. 18-33. Michael S. Foldy, '“Social Purity” and Social Pollution—Wilde and the National Health—,' in *The Trials of Oscar Wilde—Deviance, Morality, and Late-Victorian Society*— (New Haven and London: Yale University Press, 1997), pp. 129-53.
- 4) Ed Cohen, *Talk on the Wilde Side—Toward a Genealogy of a Discourse on Male Sexualities*— (New York: Routledge, 1993), pp. 97-125.
 - 5) ワイルド裁判の透徹した資料調査と関連文書やメディアなどの言説分析からコーエンが強調するのは、この時期のイギリス社会がホモセクシャルを始め、いわゆるノーマル・セクシャルではないセクシャルたちを他者として排除するメカニズムを先鋭化させた社会であったということである。
 - 6) ロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』三好郁朗訳（みすず書房、1990年）、p. 318.
 - 7) ジル・ドゥルーズ『プルーストとシーニュ——文学機械としての『失われた時を求めて』——』[増補版] 宇波彰訳（法政大学出版局、1996年）において、「恋をするひと（主体）になるということは、誰かが担っていて発している記号によって、その誰かを個体化することであり、また恋をされるひと（対象）は、記号として発生する」と説明される。ドゥルーズにおいても「恋人の身振りは、確かなになにかを表現しているが、同時にそのなにかを遠ざけ、謎に包み込んでしまう。したがって、恋する主体は、つねにその未知のなにかを読みまちがえてしまう。結果として恋人は無自覚ではあるが、つねに秘密を持ち、裏切る。」さらに「恋のシーニュが表現する本質の方から、恋（人）が発生する」という記述は、ドゥルーズの恋の経験、恋のシーニュ、そして恋のことばの経験についての論理の始源であり同時に帰結を示している。 pp. 8-17.
 - 8) 立川健二『誘惑論——言語と（しての）主体——』（新曜社、1991年）、同『愛の言語学』（夏目書房、1995年）ほか、立川の議論に＜誘惑する立場＞に立つことの危うさとそこにある倫理について多くの示唆を得た。
 - 9) ジャン・ボードリヤール『誘惑の戦略』宇波彰訳（法政大学出版局、1985年）、pp. 108-10.
 - 10) 同上、p. 110.
 - 11) 立川健二『誘惑論』、pp. 165-71.

- 12) 柄谷行人『探究Ⅱ』（講談社、1994年）、pp. 10-37.
- 13) ジル・ドゥルーズ『プルーストとシーニュ』、pp. 46-7.
- 14) Craft, 19-21.
- 15) W. ゲルダート『イギリス法原理 [原書第8版]』末延三次、木下毅訳（東京大学出版会、1985年）、pp. 62-67.
- 16) 「ナルシズム入門」『フロイト著作集5』所収、懸田克躬、高橋義孝ほか訳（人文書院、1969年）、pp. 121-23.